



Title	在宅終末期ケアにおけるSandwich Generation Caregiversと子どもとの世代間対話
Author(s)	安井, 渚
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105768
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (安 井 渚)

論文題名 在宅終末期ケアにおける Sandwich Generation Caregivers と子どもとの世代間対話

【背景】人生の最後について、本人の意向や価値観を家族と多職種が継続的に対話する Advance Care Planning (ACP) の推進と在宅終末期ケアの整備が求められている。子育てをしながら高齢者を看取る Sandwich Generation Caregivers (SGCs)は増加しているが、このような状況における子育て期の親子と在宅で人生の最後を迎える祖父母の多世代家族に対するACP実践の構造や、在宅終末期ケアにおけるSGCsと子どもとの対話プロセスは十分に記述・理論化されていない。

【研究1】子育て期の親子と終末期にある祖父母（SGCsにとっての親または配偶者の親）の多世代家族を対象とした在宅における訪問看護師のACP実践の構造を抽出することを目的とした。2022年1月－2024年2月に、訪問看護師20名を対象に半構造化面接法によるインタビューを実施し、Grounded Theory Approach (GTA) を用いて分析した。参加者は平均年齢47.3歳、訪問看護経験11.7年（5年－25年）、CNS 1名、CN7名であった。多世代家族を対象とした在宅における訪問看護師のACP実践は2段階の構造を呈していた。まず、訪問看護師は介護者であるSGCsと終末期にある祖父母を対象に、基盤となる【在宅での看取りを支える実践】を行っていた。次に、子育て期の親子と終末期にある祖父母を対象とした【多世代を繋ぐ実践】、【子どもと向き合う実践】、【体験と伝達の実践】へと実践が繋がれていた。以上のように、SGCsと終末期にある祖父母への実践を基盤として、子育て期の親子と終末期にある祖父母の多世代家族を対象としたACPを活性化させる看護実践の構造が明らかとなった。

【研究2】祖父母の在宅終末期ケアに関する子育て期の親子の対話プロセスを明らかにすることを目的とした。2022年1月－2025年3月に、SGCsと祖父母の在宅終末期ケアを経験した子ども（9－22歳）16組を対象にdyadic interviewを実施し、GTAを用いて分析した。参加者のSGCsは平均年齢47.4歳、子ども14.6歳、祖父母との同居10組、別居6組であり、祖父母の死亡からの平均経過期間は3.5年（2週間－7年）、主な疾患はがん（n=8例）、肺疾患（n=2例）、心疾患、老衰等であった。祖父母の在宅終末期ケアに関する子育て期の親子の対話プロセスとして4つのカテゴリーを抽出した。【オープンな情報共有への試み】を通じ祖父母の状態を共有し、【生活の再調整に対する共通認識】により日常生活を再調整しながら生活の優先順位や互いの役割をすり合わせていた。さらにケアへの参加による【祖父母の終末期と向き合う共同体験】を重ね、祖父母への愛着、死別への恐れや不安を分かち合う【死期が迫る祖父母への感情共有】が生じていた。これらの世代間対話は、親子が終末期を受け止める準備段階として機能しており、祖父母の在宅終末期をネガティブライフイベントではなく、家族にとって意味のある時間へと転換させる役割を果たしていた。

【総括】援助者（訪問看護師）と在宅終末期ケアの当事者（SGCsと子ども）双方のデータを用いて検討した結果、在宅終末期を家族全体で肯定的に意味づけ過ぎず上での、SGCsと子どもとの世代間対話に関する中範囲理論が生成された。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (安 井 渚)			
論文審査担当者	(職)		氏 名
	主 査	教授	山崎 あけみ
	副 査	教授	小西 かおる
	副 査	教授	荒尾 晴恵

論文審査の結果の要旨

人生の最後について、本人の意向や価値観を家族と多職種が継続的に対話する Advance Care Planning (ACP) の推進と在宅終末期ケアの整備が求められている。また55歳以下の介護者のうち、9人に1人は小学生以下の子どもを育てており、育児と介護が重なる世代 Sandwich Generation Caregivers (SGCs)は増加している。本研究は、このような状況における子育て期の親子と在宅で人生の最後を迎える祖父母の多世代家族に対するACP実践の構造や、在宅終末期ケアにおけるSGCsと子どもとの対話のプロセスについて、Grounded Theory Approach (GTA) を用いて、中範囲理論を提示することを目的とした。

【研究1】子育て期の親子と終末期にある祖父母（SGCsにとっての親または配偶者の親）の多世代家族を対象とした在宅における訪問看護師のACP実践の構造について分析した。2022年1月－2024年2月に、訪問看護師20名に半構造化インタビューを実施した。平均年齢47.3歳、訪問看護経験は平均11.7年（5－25年）、CNS 1名、CN 7名であった。子育て期の親子と終末期にある祖父母への訪問看護師のACP実践は、2段階の構造を呈していた。まず訪問看護師は、介護者であるSGCsと終末期にある祖父母に、【在宅での看取りを支える実践】を行っており、親を看取るSGCsに対して、在宅看取りへの納得と心理的安定を支援する基盤となるコアカテゴリーであった。次に、【多世代を繋ぐ実践】【子どもと向き合う実践】【体験と伝達の実践】へと繋がれており、以上のような子育て期の親子と終末期にある祖父母の多世代家族への看護実践の構造が明らかとなった。

【研究2】祖父母の在宅終末期ケアに関する子育て期の親子の対話のプロセスについて分析した。2022年1月－2025年3月にSGCs17人にインタビュー後、祖父母の在宅終末期ケアを経験した子ども（9－22歳）とSGCs 16組にdyadic interviewを行い親子に共通するカテゴリーを抽出した。平均年齢はSGCs47.4歳、子ども14.6歳、祖父母との同居10組、別居6組であり、死別からは平均3.5年（2週間－7年）経過しており、主な疾患はがん、肺疾患、心疾患等であった。対話のプロセスは、次のとおりであった。

在宅終末期に親子は、【オープンな情報共有への試み】を通じ祖父母の状態を共有し、【生活の再調整に対する共通認識】により日常生活を再調整しながら、生活の優先順位や互いの役割をすり合わせていた。さらに子どもがケアに参加することにより【祖父母の終末期と向き合う共同体験】を重ね、祖父母への愛着、死別への恐れや不安を分かち合う【死期が迫る祖父母への感情共有】が生じていた。これら4つの世代間対話は、終末期を受け止める準備段階として機能していた。即ち在宅終末期が、SGCsにとって親、子どもにとっては祖父母との死別というネガティブライフイベントとしてだけではなく、家族生活の日常で意味のある時間へと転換させる役割を果たしていた。

本研究において中範囲理論として提示された、SGCs とその子どもへの訪問看護実践の構造と、親子の世代間対話のプロセスは、在宅終末期ケアにおいて、子どもを含む多世代家族への支援につながる知見であり、本論文は博士（看護学）の学位授与に値するものである。